

『東京外国語大学史』刊行に当たって

本日、一九九九年（平成十一年）十一月四日は、東京外国語大学の独立百周年（建学百二十六年）記念日であります。永い歴史と伝統に彩られた本学が、まさに二十一世紀の本学の新しい発展を図るべく、二〇〇〇年秋には府中市の新キャンパスで授業が開始されるという懸案のキャンパス移転統合を目前にして、こうして歴史の画期としての記念式典を催すことができませんことは、まことに慶賀すべきことであり、私にとりましても身に余る光栄であります。本学を今日まで支えてきて下さった皆様方に、心から厚く御礼申し上げます。

本日の独立百周年（建学百二十六年）を記念して、ここに『東京外国語大学史』本巻の刊行という悲願も実現することができました。引き続き史料篇の編纂にも取り組んでおりますが、各執筆分担者は、それぞれの学問分野を越えて全力投球で執筆しており、本学ならではの協同作品としての『東京外国語大学史』がここに誕生したのであります。関係各位のご支援ご協力ともども深く感謝しております。このたびの『東京外国語大学史』が、広く皆様方の閲読を賜われますようお願い申し上げます。

ところで、私が学長に就任して以来の主要な任務として、キャンパスの移転統合や大学改革の推進とともに、百周年記念事業の実行という重い課題を背負ってまいりました。そして、百周年記念事業のなかの最も重要な仕事が大学史の編纂であると考えておりました。その起源を遡れば、一八五七（安政四）年正月十八日（陰暦）に生徒一九一名をもって開校した番書調所にまで及ぶことが今回の編纂作業を通じて確定できた、わが国最古の学府ともいえる本学

の一世紀有半の歴史を記述するという作業が、きわめて苦勞の多い、時間と手間のかかるものであろうことは十分に覚悟しておりましたが、大学史をもつことの重要性に鑑みれば、この仕事はやはり完成しなければならぬとの強い信念に支えられて、私たち編纂委員一同、日夜努力を重ねたつもりであります。

その最大にして唯一の理由は、本学の場合、これまでに大学史がいつさい存在しておらず、わずかに一九三二（昭和七）年刊行の小冊子『東京外国語学校沿革』があるのみでありました。しかも本学は一九一三（大正二）年の神田大火、一九二三（大正十二）年の関東大震災、そして一九四五（昭和二十）年の東京大空襲によつて校舎を消失し、学籍簿だけは、一八九七（明治三十）年以後のものが保管されていますが、大学史の基本資料としての要覧類などもかなり欠如していて、大学の歴史に関する基礎資料がほとんど整っていないという状況にありました。しかし、なんとしても今世紀最後の機会である今回、本学の歴史をまとめておかなければもう二度と大学史を編むことは難しいのではないかと思われ、本学の百周年記念事業委員会のなかに、一九九六年九月、私自身が委員長となつて百年史編纂委員会（現・東京外国語大学史編纂委員会）を発足させ、本格的な活動が始まつたのであります。一九九七（平成九）年四月の創立百周年（建学百二十四年）記念には予備的な『東京外国語大学沿革略史』を刊行し、その後の本格的な作業を経て今回の発刊にいたつたのであります。

ところで、大学として百周年記念事業を計画するに当たつて、慎重な検討を要する重要課題は、百周年記念の呼称と記念式典の開催日の決定でありました。その理由は、本学の歴史が複雑な変遷を経ていることと、すでに述べましたように、本学には大学史が編纂されておらず、明治初期以来の近代教育黎明期における本学前身諸機関のきわめて錯綜した変遷過程が歴史資料に基づいて解明されていなかったからであります。そこで、大学史編纂委員会は一九九七（平成九）年一月下旬には、解明された史実に依拠して本学の百周年をどう定義すべきかについての編纂委員会と

しての一応の結論を出し、同窓会である東京外語会の役員との協議も経て、本学の百周年記念事業委員会、さらに教授会、評議会の同意を得、同年二月下旬までに百周年記念事業に関する呼称を決定いたしました。すなわち、本学の「創立」は一八九七（明治三十）年四月二十二日とする。それは学則第十二条に創立記念日が四月二十二日と定められていること、本学は過去において、十五周年、二十五周年および六十周年の記念式典を、一八九七（明治三十）年四月二十二日に当時の高等商業学校（現在の一橋大学の前身）附属外国語学校として本学が新たに創立された時を起点にして挙行している事実が判明したことなどに拠るものであります。但し、この場合には、一八九七（明治三十）年以前の様々に重要な本学の歩みが包摂されなくなり、本学のそもその前身である東京外国語学校の一八九七三（明治六）年の開設を「建学」と呼ぶことを確定しました。しかし、高等商業学校附属外国語学校は、一八九九（明治三十二）年四月四日に再び東京外国語学校と改称されて高等商業学校から分離独立し、その後の永い歴史を歩みます。そこで、この分離独立の時点を「独立」と定義しました。この時を起点に本学が創立八十周年記念式典を一九七九年十一月に挙行したことから、また従来は一九九九年を百周年記念事業（募金活動など）の年として備えてきたことに鑑みて、今回の百周年記念事業の呼称に関しては、「独立百周年（建学百二十六年）」と呼ぶことを決定したのであります。以後、このような混乱が生じないために、次の二〇一七年には「創立百二十周年（建学百四十四年）」として記念すべきことを申し送ることも確認されました。

このような結論を得るまでには、私自身も随分思い悩みましたが、今となつては「独立百周年（建学百二十六年）」という一般的ではない呼称をあえて提起することによって、明治初期以来の本学の歩みの歴史の意味を、より広く世間に問いかけることができるようにも思っております。関係各位の皆様には、何卒よろしくご理解下されますよう、お願い申し上げます。

本学の現職の教官から成る編集委員会は、幸いにして、本学職員や名譽教授の先生方を中心とした執筆分担者や東京外語会の同窓生の方々の献身的なご協力により、過去三年余の期間に三〇回もの会合を開き、毎回実り多い議論を重ねてまいりました。もとより、このような作業の過程では、とくに明治期の近代化に果たした本学の役割や戦争期の本学の在り方をめぐる歴史的評価にかかわる激しい論争が編集委員会内部でたたかわされたことも事実です。しかし、『東京外国語大学史』の公的性格に鑑み、評価の分かれる諸点や表現上の統一などに関しては、基本的には各執筆者の見解を尊重するという原則のうえで、編集委員長としての私の責任で補正や調整をさせていただきました。この点でのご協力にも感謝しております。こうして来世紀に引き継ぐべき正規の大学史を、まさに世紀末の現時点で刊行できましたことを、学長として大変嬉しく思っております。

編集に当たっては、稲田雅洋、渡邊雅司両副委員長をはじめとする編集委員の皆様、大学史資料室の皆様のご協力をいただき、また担当の藤原印刷株式会社にはさまざまなお無理をお願いいたしました。記して感謝する次第であります。内容には細心の注意を払いましたが、不十分な箇所や誤りもあるかと思っておりますので、各位の忌憚のないご意見をお寄せいただければ幸いです。

最後に、刊行に当たって資金的なご協力をいただいた東京外国語大学創立百周年記念事業後援会にたいし、厚く御礼申し上げます。

一九九九（平成十一）年十一月四日

東京外国語大学長 中 嶋 嶺 雄